

愛知県半田市の総合型地域スポーツクラブの展開と運動部活動

夏秋 英房

はじめに

愛知県半田市は、江戸時代は江戸廻船の拠点として、明治以降は鉄道の施設と大本営設置を契機に発展した港湾都市である(図1)。また醸造酢発祥の地でもあり、醸造業が地場産業の中核をなしている。毎年10月に開かれる山車祭は全国的に有名である。

面積は約47km²、住民基本台帳人口は1999年に約11万人であり、人口集中地区人口比は86.3%ではほぼ全域にわたる。昼夜間人口比は99.5%で、産業3部門別就業人口比は、第1次2：第2次43：第3次55と、第2次と第3次産業で半々という構成である。朝日新聞社のデータベースによると、市の民力総合指数は89.6であるが、一人あたりの民力水準は、全国を100とすると102.9であり、ある程度豊かな地域であるといえよう。

半田市は、中学校区のひとつである成岩(ならわ)地区に平成8年3月に総合型地域スポーツクラブを全国に先駆けて発足させたことで知られる。その後、平成10年から12年までの時限組織として文部省の助成を受けて「CLUB2000(半田スポーツ健康推進協議会)」を結成し、市内の5つの中学校区ごとに総合型スポーツクラブを創る施策を展開し、さらに平成14年3月には「半田市スポーツ振興計画」を策定したところである。

筆者は平成12年4月12日に半田市教育委員会における聞き取り調査と成岩スポーツクラブの視察を行い、各種資料を入手した。本稿では、それらの情報とそれ後の経緯に基づいて半田市の総合型地域スポーツクラブの形成過程を概観し、それが学校の特別活動のあり方とどのように関わるかを検討していく。



図1 半田市の位置

第1節 成岩スポーツクラブ設立の経緯

成岩スポーツクラブは、成岩地区少年を守る会の構想が発端となって、文部省の「総合型地域スポーツクラブ育成モデル」として設立された。総合型地域スポーツクラブは、主にヨーロッパに見られる地域スポーツクラブの形態で、地域において子どもから高齢者まで様々なスポーツ愛好者が参加できる総合的なスポーツクラブのことである。「総合型」とは、「世代の総合」と「種目の総合」の意味で、総合型地域スポーツクラブとは、総合型の、地域社会での生活を基盤としたスポーツクラブのことである(図2)。

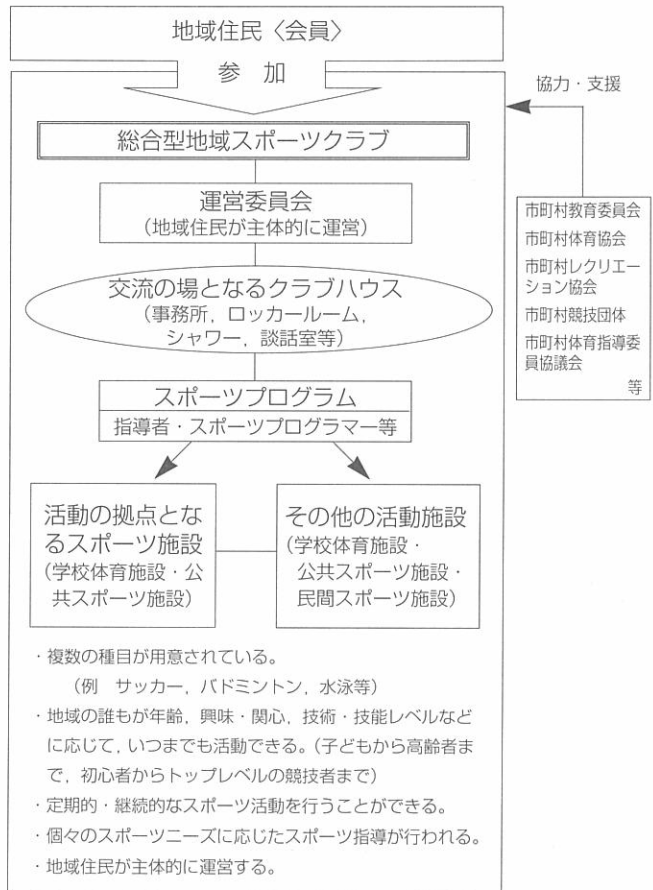
設立の中心人物である半田市教育委員会の榎原孝彦氏への聞き取り調査と、各種資料から、設立の経緯をまとめてみよう。

榎原氏はもともと成岩中学校の国語科の中学校教員であり、サッカー部の

指導などもしていたが昭和63(1988)年より生徒指導担当の指導主事として成岩中学校に配属となった。スポーツクラブの根底の発想は、スポーツ強化・選手育成ではない。中学校の生徒指導主事として活動する中で、地域と学校との関係をより深く捉えるようになった。その発想の原点は次のようなものである。

まず、学区内の子どもたちに問題状況があるが、住民は人ごとのように捉え、保護者でさえ当事者意識が欠落している場合が見受けられた。あいさつや声かけも減少していったように感じた。そこで、「街に子どもと大人との関係のネットワークを広げよう」と考え、スポーツを媒介としてこれを実現しようとしたのである。

一方、学校のあり方も閉鎖的であった。もっと地域への発信が必要であり、単に子どもを預かって育てる営みから、地域住民と想いを共有し、地域づくりをしながら子どもの教育に取り組むべきである。「学校は、地域社会の中で、その存在を発揮しなければだめだ」という発想である。その象徴的意



- ・複数の種目が用意されている。
(例 サッカー、バドミントン、水泳等)
- ・地域の誰もが年齢、興味・関心、技術・技能レベルなどに応じて、いつまでも活動できる。(子どもから高齢者まで、初心者からトップレベルの競技者まで)
- ・定期的・継続的なスポーツ活動を行うことができる。
- ・個々のスポーツニーズに応じたスポーツ指導が行われる。
- ・地域住民が主体的に運営する。

(文部科学省「スポーツ振興基本計画」を参考に作成)

出所：半田市スポーツ振興基本計画 平成14年3月

図2 総合型地域スポーツクラブの概要

義のあるものとして、学校内にスポーツクラブを設置しようと考えたのである。教師・生徒間の信頼関係は地域での活動の中でも作れるものであり、すべての子どもの育ちを「線」(成長の過程)で理解することが必要である。新任教員の意識を啓発することは校長の務めであって、それなしでは学校と地域の間にズレが発生してしまう。

また、学校をはずしたら地域スポーツは育たない。学校と重なり合った地域スポーツを作る必要がある。このままだと特化されたクラブチームの繁栄がある一方で、子どものスポーツ活動が分裂し、細分化してしまう。

とはいえ、成岩地区に特に地域スポーツクラブを作らねばならない差し迫った事情があったわけではない。成岩地区は旧住宅街で流入人口が少なく、もともと「勉強よりも運動」「俺たちの学校」意識も強い。昭和の末に成岩中学校に着任したころは、管理教育の中でもほのほのしていた。ほったらかしにしているようで、突っ張らせながらも掌中に入れてあるといった、昔風の良さを保った指導が行われていた。しかし、そのような成岩地区の生徒の新住民と旧住民の割合構成も、赴任してからほぼ10年間のうちに、5:5から7:3に変化していった。新たに生徒と地域との関係を生み出す契機が必要である。成岩地区は以前から地域クラブが盛んな土地柄で、少年野球や少女バレーのチームが学区内の3つの公民館の単位ごとに活動をしていた。しかし部員が集まらず、運営に支障を来すようになり、また指導者も高齢化していった。

成岩地区には40年近い歴史をもつ「成岩地区少年を守る会」がある。この団体は青少年の非行防止のための巡視活動や夏休みのラジオ体操の会などをしており、学校、PTA、自治会長、児童委員などの組織で構成されている。会長には成岩中学校のPTA会長が役職を退いた翌年に就任し、事務局は成岩中の生徒指導主事が当る。榊原氏は平成5年から事務局を務め、地域と学校の両方にスタンスを置くなかで地域からの信頼を得ていった。

地域と学校を包含した「少年を守る会」を土台として、「地域の子どもは地域のみんで育てよう」を合い言葉にスポーツクラブを立ち上げた。榊原氏は成岩にいるときは行政の人間としているのではなく、成岩スポーツクラブのコーディネーターとして振る舞っている。

第2節 成岩スポーツクラブの展開と特色

(1) 成岩スポーツクラブの設立と展開

平成6年6月に、少年を守る会総会において成岩スポーツタウン構想を提起した。4年計画で育てる会による日常的な活動へと転換する方針で趣意書をまとめた。

平成7年度は、部活動と社会体育の整合を図ることが課題であった。文部省指定のモデル事業の推進母体となるよう、市教委から成岩地区少年を守る会が要請を受けた。小・中学校生を対象にした総合的なスポーツクラブであるが、既存の社会体育の諸団体や活動との整合を図り、例えば高齢の指導者の理解を得ることが課題であった。

平成8年3月にクラブを設立し、4月から説明会や会員募集などの活動に入った。主に小中学生を対象にした事業を立ち上げた。一方で、少年を守る会の活性化も課題であった。すでに平成3年から4年

間かけて七夕祭りや親子たこ揚げ大会等のイベントを打ち上げて経験を積んでいた。成岩中学校PTAのなかには、労力をいとわない人が多くいたし、元来半田市には山車祭りがあり成岩も祭りが盛んであり、その心意気を誇る気風がある。スポーツクラブもその理念の下に人が集まるもので、祭りのイメージと重なる。理念に向けて労力と資金を持ち寄ることで心意気を見せるのである。スポーツクラブは大人の主体性を育て、子どもに見せる格好の場であった。

設立1周年で、会員数は1276名、指導者は80名であった。

平成9年度はスクール活動の充実とサークル活動の基盤整備を行った時期である。つまり、大人たちや、これまで学校開放を利用してきた団体を取り込んで、「総合型地域スポーツクラブ」の形態を整えたのである。4月にサークル活動を立ち上げ、5つの部門体制が完成した。5つの部門とは、研修・広報／メディカル・ケア／イベント・プロモート／講座を中心としたスポーツスクール／ユースと生涯にわたるスポーツサークルという5つの事業である(図3)。

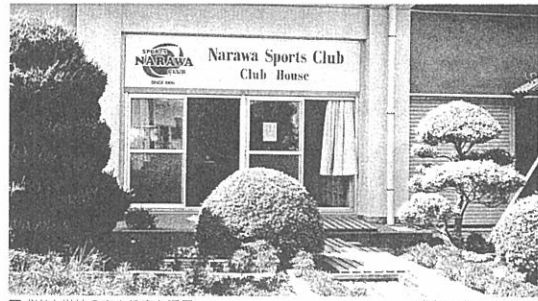
また、地域内の学校体育施設の一般開放の

利用調整権を半田市より委託され、クラブ団体登録制度を制定した。いわば、学校体育施設の自主管理が始まったのである。4回目を迎える成岩スポーツフェスティバルの日程を2日間ほどに拡大して実施したり、多くのイベントや大会を実施した。会員数は1413名、指導者は102名に増大した。

平成10年度は、「子どもたちがスポーツに打ち込むには、家族の理解と応援が必要」という考えからファミリー会員制度を4月に導入し、会員は原則として家族で入会することにした。また、ボランティアシップと受益者負担の原則に基づいて、年会費(1万円と保険料)の自動引き落とし制度を導入することで独立財源基盤を確立した。

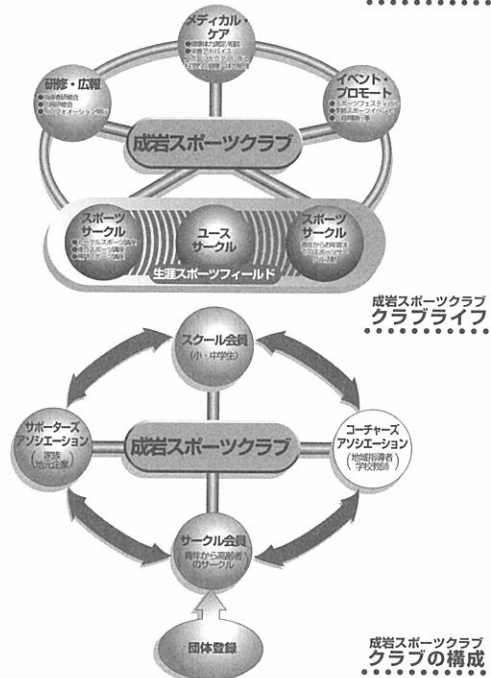
会員自身がお金と労力と時間を提供し合ってクラブ運営の基盤を築くという発想を具体化したのである。また、「地域の子どもは地域の大人が育てる」という考えでクラブを運営することにした。

クラブの構成は、家族と地元企業からなるサポーターズアソシエーション、小・中学生からなるス



■成岩中学校の空き教室を活用

成岩スポーツクラブ
クラブハウス



成岩スポーツクラブ
クラブライフ

成岩スポーツクラブ
クラブの構成

出所：NARAWA SPORTS CLUB GUIDE '99
図3 成岩スポーツクラブの外観、機能と構成

クル会員，地域指導者と学校教員からなるコーチーズアソシエーション，団体登録をした青年から高齢者までのサークル会員の4つに整理した(図3)。したがってメンバー構成も変わり，ファミリー会員471世帯(小中学生743名・サポーター1011名)，サークル会員170名，指導者105名となった。成岩中学校区の人口が約1万8千人なので，この構成員数は地区人口の約11%にあたる。

(2) 成岩スポーツクラブの特質

以上のような経緯で発足し，展開してきた成岩スポーツクラブの組織と運営の特色は，次のようにまとめられる。

- ①単一のスポーツ種目ではなく，複数の種目を選択できる。スポーツスクールでは異年齢の子どもと一緒に活動でき，小中一貫の指導体制ができている。
- ②成岩小学校，宮池小学校，成岩中学校の体育施設などを活動の拠点として，定期的・計画的なスポーツ活動を行う。
- ③情熱のある質の高いスポーツ指導者を配置し，個々のスポーツニーズに対応した指導をする。研修を終えたスタッフは指導謝金を請求できる。平成9年度からクラブ独自の資格認定制にした。
- ④「成岩地区少年を守る会」傘下の公的なクラブである。
- ⑤会員は原則として成岩中学校区に在住する家族で入会する。小中学生の保護者はサポーター会員として同時に入会する。
- ⑥地元新聞社の協力を得て広報誌を毎月，成岩地区に配布している。
- ⑦成岩スポーツセンター(平成13年度完成予定)の管理運営を行政より委託される。
- ⑧将来的にNPO法人化を目指し，その公益性を強調していく。

また，運営の原則や理念に見られる特性は，以下の通りである。

- 1) 「地域と学校が一体となって立ち上げた」ことで，行政主導によらず，地域ぐるみのスポーツを通じた「町興し」である。その中で，成岩中学校は地域の動きと連動して開かれた学校へと校内改革を進めた。
- 2) 「会員がクラブライフを楽しめるようなクラブづくりをめざしている」ことで，地域コミュニティへの広がりや深まりを目指している。それがクラブの5部門にわたる多彩な活動に展開している。
- 3) クラブの運営が「地域住民の手による自主運営である」ことで，受益者負担制とボランティアシップを基盤として，「自分たちのクラブを自分たちで創る」という姿勢をとっていることである。実際の運営や役割を担当する人はすべて地域の住民や地元の教師である。

第3節 他の中学校区での総合型地域スポーツクラブの展開

平成10年度からは，成岩スポーツクラブは半田市の政策を推進する2000年度までの時限組織である「CLUB2000」に参画している。この事業は，半田市内の5つの中学校区ごとに総合型地域スポーツクラブを作るもので，文部省の「スポーツ・健康推進地域モデル事業」に指定され，財源は文部省から直

届交付されている。各中学校区の学校施設を拠点にした、多世代、多種目型の総合型地域スポーツクラブをサテライト化し、2001年度からは発展的に解散して、独立セクターとして広域スポーツセンター化させ、生涯にわたるスポーツライフの基盤組織として、他の団体と連携を図る構想である。

一例を挙げると、平成10年度を準備期間として平成11年5月に亀崎・有脇地区に地域スポーツクラブ(YOUKI)が誕生した。設立の趣旨は地域の振興と世代間の交流、子どもたちの健全育成であり、会員数は立ち上げ時からすでに1200名を数えている。

亀崎中学校ではYOUKIに学校を挙げて協力するために、望ましい部活動のあり方について検討し、YOUKIの活動に参加しやすいように配慮してきた。具体的には、部活動の精選を図り、希望参加制にすると共に、教員も積極的にコーチとして地域住民と共に活動している。子どもたちは平日(火、水、金)は部活動において活動し、土・日及び祭日はスポーツクラブで活動している。柔道などは部活動の中にはないが、地域指導者の熱心な指導の下、スポーツクラブで練習し大会に出場して入賞するまでに成長した。学校教育において身につけるべき「学力」を問題解決能力として捉えるならば、スポーツクラブYOUKIでの活動も学習の場とみなせるのであり、地域ぐるみで子どもの活動を支える仕組みを充実させるためにも、亀崎中学校区ではスポーツクラブと部活動の連携をより強固なものにすることや、小中学校が連携することなどを模索している。

このようなCLUB2000の事業展開は、平成14年3月からは「半田市スポーツ振興計画」へと引き継がれ促進が図られている。

第4節 成岩で総合型地域スポーツクラブが成立した背景と課題

成岩での取り組みの背景は、地域クラブが抱えるどこにでもある問題(クラブ員募集の低迷、指導者の高齢化、ワンマン的指導者の負担過剰、中学校部活動との断絶)と、どこの中学校でも直面することになる課題(部活動の功罪、完全学校週5日制と学校のスリム化、生徒数の減少と教員数の減少)があったに過ぎないという。決して成岩地区固有のものではない。ただ、特別に言えることがあるとすれば、学校と地域が「少年を守る会」を母体とした地域コミュニティの中で、互いの問題解決を図ろうと考えた点である。

その中で、成岩中学校の改革と考え方が鍵を握ってくる。榊原孝彦氏の講演原稿をもとに、まとめる。まず、部活動に偏重しがちだった中学校生活のバランスを見直した。具体的には「全員加入制を希望者加入制」にした。そしてその活動は「平日の3日間」とし、土曜、日曜は家庭や地域で生徒が思い思いに過ごすゆとりを作った。部活動のない授業は「ふれあいタイム」として、教師と生徒、生徒同士がゆったり交流できる時間とした。

教師には、積極的に地域の活動に貢献するように勧めた。学校長自ら成岩スポーツクラブのスーパーバイザーとなっているのを始め、コーチアソシエーションにも全校の教師の約60%が加わっている。成岩の取り組みと提携することに、教師の間で意見が分かれたとき、当時の学校長は職員会議で「全員に協力しろとは言わないが、協力できない人も足は引っ張るな」と発言したそうである。特に学校長がリーダーシップを発揮し、教職員を地域への貢献に向かわせる条件を整え、促していくこ

とが肝要である。

このような改革の根底にあるのは、「学校を地域に開くことは、単に施設を開放することではなく、生徒の生活の場を地域に広げることだ」という発想である。学校のスリム化は、家庭や地域の豊かさに繋がらなければならないので、そのために学校は、学校が持つ人的資源を地域に開き、地域コミュニティの中でイニシアチブをとっていくことが大切だと考えている。

しかし、いくつか問題がある。まず第一に、総合型地域スポーツクラブが部活動の肩代わりをしているだけではないか、という見方についてどう応えるか、という問題がある。学校教育から社会体育に部活動が移管しつつあるとはいえ、指導者もメンバーも練習内容も代わり映えしない部分がある。制度の改革が先行し、意識の改革が追いつかない面がある。生涯学習スポーツにおける少年期の望ましいスポーツ活動を考える視点に立った新しい意識を形成し、議論していく必要がある。特に成岩スポーツクラブでは、地域サークル活動との連動が鍵を握っていくことだろう。

第二に、総合型地域スポーツクラブの中で育ってくる子どもたちは様々な顔をもつようになる。従来、画一的な、同質性を前提とした学校教育にはなじまない子どもが育つ可能性もある。教師にしてみればそれはあまり都合がよくないと受け止められる要素が残っている。

第三に、学校部活動の縮小をめぐる抵抗感が強いことである。例えば保護者は、部活動を土曜・日曜もやってくれた方がいいという意見である。しかも部活動は無料である。また、学校の教員は、部活動に熱心な教員も、名目だけ顧問をしている教員も共に学校部活動の縮小に反対した。文部省の調査研究協力者会議の調査では、「運動部活動を将来どのようにしていくのがよいと思うか」と中学校教員に尋ねたところ、53.2%の教員が「地域に移した方がいい」と答え、そのうち60.0%は、「基本的には社会体育へ移行すべきであるが、短・中期的には無理である」という回答であった〔文部省体育局、平成10年〕。つまり、総論としては部活動の社会体育化について教員の過半数は賛成の意思を表示しているが、いざ各論になると「無理である」と反対に回ってしまうのである。

第四に、住民のスポーツの世話は行政がするものという意識を変えていけるか、という点がある。現状としては、市町村全体に関わるスポーツ振興の方策、またはそれに関連する事業や取り組みは、ほとんど行政主導で動いてきた。それがすべてになつては、住民の主体的なスポーツ組織を地域に生み出していくことは難しい。また、住民に自発的に地域スポーツに関わろうとする意識が生まれなければ、たとえ地域スポーツクラブができて長続きしない。

ボランティア活動の推進という観点から考えても、福祉関係の分野では市民のボランティア活動が普及しているが、スポーツの分野では行政や学校がスポーツ振興の中心であった。そのため日本では、自分がスポーツを楽しむ以外に、人のためにスポーツの世話をするという認識が定着しておらず、まだまだ意識化が図られている段階である。よほど大きなイベントのボランティアでなければ、企画、準備、運営などに関わり、スポーツの支援をしていこうという機運が生まれにくい現状をどう改善するかが問題である。

第五に、既存のスポーツ団体の姿勢がある。種目の縦割りの考え方が地域クラブの中にはあり、それに対して総合型地域スポーツクラブは横軸を広げて種目の総合を目指している。この縦軸と横軸

の整合が課題となってくる。

第六に、クラブハウスが必要不可欠である。ヒューマンウェアとソフトウェアの開発は地域が担ってきたが、ハードウェアの建設については資金的にどうにもならず、中学校の空き教室を間借りしている状況である。公共のスポーツ施設のソフト面での管理運営をクラブに任せてもらうことが望ましい。

第七に、成岩にとどまらず、いずれの地域においても、ペーパープランは多くあるが、誰が実践していくか、という問題が残る。「環境がまだ整わないから」ということでなかなか踏み出せないという実情に対して、その環境は一体誰が整えるのか、と問い返す必要がある。行政は地域のイニシアチブに期待し、地域は行政や学校に「まず環境整備だ」と期待する。学校は「受け皿がない」といって子どもたちを離そうとしない。そうして三すくみ、四すくみの状態になってしまう。「誰かがやらねば」という共通の思いを抱きながらも、互いにその「誰かを」他に求め合っている。成岩では、成岩地区少年を守る会が母体となったが、他の地域でも、地域の持つ潜在的な教育力を引き出し、それをひとつの方向にまとめていくコーディネーターの役割を果たす「誰か」がでてくる必要がある。

第5節 学校の特別活動や部活動との連携をどう進めるのか

平成14年3月に策定された「半田市スポーツ振興計画」によると、総合型地域スポーツクラブの考え方は、横軸の振興と縦軸の振興とからなる。横軸は誰もがいつでもいつまでもスポーツに親しめる環境やシステムを整備することであり、縦軸は最高レベルの競技者を育成する環境やシステムを整備することであるが、縦に高める方向は、さらに広域スポーツセンターを整備することで可能になる。

総合型地域スポーツクラブの経営には、学校依存型システムから地域住民で支える地域主導型クラブシステムへの移行と、種目別・年代別の縦割り型システムから横断的ネットワーク型システムへの移行がその条件となる。しかし、学校に依存してきたこれまでの環境から、自治的なクラブ環境への移行には、開かれた学校づくりの促進と共に、地域住民の主体者としての意識変革が伴う必要がある。

完全学校週5日制の下で、部活動運営を改善し地域スポーツクラブと連携していくには、部活動を柔軟に運営するとともに、教師の指導力を資源と位置づけて地域に貢献することで、開かれた学校運営をする基盤としながら地域住民の支えとなる必要がある。特に学校中心のスポーツから地域への移行期においては教師の知識と経験が果たす役割は大きい。その場合、教師の負担の増大を防ぎ、勤務条件の整備をどう進めるのかが課題となろう。

具体的には、「半田市スポーツ振興計画」ではアクションプランとして次の4点が挙げられている。

- ①部活動希望加入制や曜日登録制などを導入し、柔軟な運営に努める。
- ②部活動指導者への研修を充実し、一部に見られる勝利至上主義的な閉ざされた学校部活動の運営を改善する。
- ③学校週5日制の趣旨に則り、児童生徒の自主的な活動を促す観点から、原則的に土曜日、日曜日の学校部活動は行わない。

④校務分掌中に、地域スポーツクラブ担当を位置づけて、地域と学校とのコーディネートに当る。

また、その活動のために、授業時間数の軽減など、学校の実情に応じた適切な配慮を施す。

この①、②のために、指導主事との連携による校長会の理解や、運動部活動担当者会議等をおして望ましい部活運営について協議する。また、教員に地域スポーツアシスタント養成講習会の受講を促し啓発する。また、③のためには、地域スポーツクラブの設立と同時に学校休業日の部活動は原則禁止とする。ただし学校の実情により1年間程度の暫定期間を設ける。さらに④のために、「学校・地域連携促進スポーツマネージャー」を各学校に配置するとしている。

また、児童生徒の保護者の間には総合型地域スポーツクラブの趣旨や理念をまだ十分に理解せず、とまどいが残っている。学校に依存しがちであった従来からの意識の改革が必要であるが、そのためには単にスポーツに限定した団体としてではなく、将来的にはスポーツ以外の文化・環境・福祉活動など幅広い生涯学習活動を展開する団体として認知される必要がある。その場合には、連携する部活動の内容が体育的なものに限られず、知的なものや体験的なものにも拡大されていくだろう。

おわりに

半田市の総合型地域スポーツクラブの展開を見、その意義と学校教育との連携のあり方を検討してきた。この事例は文部科学省が推進した総合型地域スポーツクラブ育成支援事業が成功した例と捉えることもできよう。しかし、その根底には地域住民がスポーツ活動を通じて青少年の健全育成を実現しようという試みが、総合型地域スポーツクラブの形態をとり、学校教育もその動きに応じて態勢を整えていった経緯がある。また、成岩というひとつの中学区から立ち上がった動きが市全体へと広まったのである。このように見ると、住民主導型のボトムアップの形態で、学校教育の運動部活動の機能が地域社会へ移行しつつあることがわかる。学校教育と地域社会が連携・融合していく際に、特別活動が地域活動へと移行していく類型の事例である。

また、この動きの中核をなしたのは、子どもたちのためになにかをしたい、と労力を惜しまずに地域スポーツクラブの発足と運営のために働いた、「成岩地区少年を守る会」を中心とした人々の存在である。また、その人々の熱意と能力を結集する優れたコーディネーターの存在であった。

ボトムアップの形で広がった総合型スポーツクラブの事業であるが、今後は、政策課題としてその達成が全市的に目指される段階となった。果たしてトップダウン式の展開が成岩地区と同じように結実していくのかどうか、という点が注目されよう。

引用・参考文献

- CLUB2000半田スポーツ健康推進協議会「HANDA Sports Life Project 2000——学校施設を拠点に多世代、多種目型の総合型地域スポーツクラブ」1999年
- 榎原孝彦 講演原稿「成岩スポーツクラブと人・街・夢」(平成9年度愛知県体育指導員研修会「コミュニティーの核としての成岩スポーツクラブ」改題)
- 滋賀県派遣社会教育主事会編「生涯スポーツの充実を目指して」平成9年3月
- 全日本社会教育連合会『社会教育』1999年12月号、「特集 総合型地域スポーツクラブ」

スポーツクラブYOUKI「YOUKI KAMEZAKI&ARIWAKI SPORTS CLUB—— REPORT'99」

総務省「第252回青少年問題審議会議事録」平成10年10月19日

成岩スポーツクラブ「街と人と成岩スポーツクラブ——NARAWA SPORTS CLUB GUIDE'99」

日本体育学会編『体育の科学』第50巻3号，2000年，「特集 地域スポーツの将来」

半田市教育委員会「半田市スポーツ振興計画『生涯スポーツ社会の実現に向けて』」平成14年3月

文部省体育局／中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」平成10年